

5月29日 公民館講座「七日市場の歩みⅢ」 (10:00~11:00)

青年会の活動について 資料

1 青年会発足のころ

- 発足は不明。明治40年頃は発足していただろう。
 - ・名簿から 40年加入1名(15歳) 大正7年満期
41年加入1名(15歳) 大正8年満期
在任期間は12年、満期除名は27歳
 - ・謝状から 43年 温明盛尋常小学校
樹木株寄贈に謝状 七日市場青年会へ



2 明治から大正・昭和初期頃の活動

- 道標作り (昭和7年)
 - ・中萱や楡には現在も当時の道標がある。
 - ・七日市場には記録はるが現物が見当たらない。
- 諏訪神社の清掃
 - ・月の1日、10日、20日に行う。
- 小学校の庭を均す奉仕作業を行う。(感謝状 昭和7年)
- 体育競技活動
 - ・陸上競技大会 (昭和7年)・駅伝競走 (昭和7年) など



2階ホールの図書棚
<21年度の市の補助金で購入>

3 図書館の運営

- 大正末期から活動をして、昭和に続いた運営
<平成14年 区長さんから相談受け調査に>
 - ・外の物置の図書の処置 (8年コミュニティーセンター
建築時に物置に置かれた書物)
 - ・保存できるか、まず調査をと
- 調査結果からの図書数 (段ボール21箱に)
 - ・大正期 80冊 ・大戦前 167冊 ・大戦後 310冊 ※合計 557冊
- 大正時代に購入した書物など
 - ・修養書 38冊 「政治の倫理化」「如何に生活すべき乎」「農村刷新と自治」など
 - ・小説 32冊 「切捨て御免」「坊っちゃん」「青銅の基督」など
 - ・農業書 5冊 「温室園芸の知識」「養豚秘訣」など
- 図書運営のようす
 - ・昭和3年 各月 1, 5, 10, 15, 20, 25日
 - ・昭和6年 日曜日毎に 午後1時~3時
 - ・経常費は区から10円~15円補助
 - ・図書購入は松本の本屋から

4 生活改善の提言（昭和6年）

○冠婚葬祭の改善への熱意

- ・「生活改善の一部分、冠婚葬祭につきて大体の案を出し、耕地一般の自覚と実行を促す。大体賛意を表示した」（あと委員会は青年会と共同研究していく）

※青年会記録に

「時代の進行に従い生活の簡素化を図り、虚礼を廃す。旧来の陋習慣を墨守する必要はない。積極的に打破せねばならぬ。不況のため声を大にするのではない。将来は必要を痛感するだろう」とある。

- ・7年 「初集会に提出せし諸件承認ありたる」とある。

○9年 村で生活改善を通達する

○七日市場の耕地の記録には

「役場より通達ありたる生活改善に関する件は、従来七日市場にて実行し来る規定により進むこと」とある。

※耕地記録には、青年会と研究協議したとあるが、規定内容をどう決めたかは不明である。ただ、青年たちの先見の考えや勇気が、地域の人々の心を動かしていったことだろう。



青年会記録簿

5 戦時体制が進む中で

○出征会員を見送る

- ・昭和6年 満州事変起こる
- ・昭和7年 明盛村から7人入営（七日市場1人）

○鍛錬、防護意識の向上

- ・昭和8年 剣道の寒稽古を神社境内で
 - ・昭和12年 軍事講演会
- 朝6時ころから7時ころ20日間
(七日市防護団は防空演習をする)

※青年会も次第に戦争への動きの中へ 入って行く。

○昭和14年 耕地の福祉に関することも

- ・神社境内の清掃
- ・耕地内の触立（ふれだて）及常使
- ・野鼠駆除薬の配合
- ・耕地内の道路の悪い所修理
- ・県道の除雪も依頼があれば引き受ける
- ・兵士の送迎旗（耕地よりの）をもつこと

※その他 ・寒稽古 ・春秋の遠足 ・講演会

- ・会員の応召人があった時茶菓子で 送別会など

○七日市場青年会→明盛村七日市場分團に
(昭和 16 年 7 月 7 日から)

○團則の一部

第 2 条 本團ハ皇国ノ道ニ則リ團員相互ニ團体的
實踐鍛鍊ヲナシ共勵切磋確固不伐ノ国民的
性格ヲ鍊成シ以テ負荷のノ大任ヲ全クスル
ヲ以テ目的トス

○訓練部 武道精神を基に実践鍛鍊により 気力や
体力の向上を図る

- ・春秋の運動会 ・行軍教練
- ・防空練習 など

○文化部 読書創作などから教養を磨き、心情を養い
皇民的性格の教養を深める

- ・修練会 ・読書会 ・図書館の運営
- ・郷土研究 など

○厚生部 皇国の民生を保健、衛生などに関し
实际的に修練をする

- ・体力検定 ・鍛鍊遠足 ・登山行軍など

○産業部 職域において産業報国の実をあげるよう
指導する

- ・農園共同経営 ・食料飼料の増産揚する

○興亜部 皇国の理想に基き大東亜諸民族の共栄圏
の確立を進めるよう認識を深める

- ・貯蓄運動 ・廃品回収 ・消費節約運動
- ・海外開拓現地事情の研究 など

※興亜部の一例

- 17 年度 毎月 8 日に国旗を掲揚
- ・ 3 月 28 日 青年団一同、軍人分会、
女子青年団で 国旗柱を山より出す
(朝 6 時集合 夕方 6 時公会堂に)
- ・ 3 月 31 日 男子青年団、女子青年
団で皮むきをする
警防団に依頼して建てる。皆一生
懸命やる (8 時半～5 時頃)
- ・ 4 月 8 日 5 時半 青年団、女子青
年団公会堂で国旗掲揚

○出征兵士の増加

- ・ 15 年 3 人 ・ 16 年 5 人 ・ 17 年 8 人 ・ 18 年 20 人 ・ 19 年 10 人

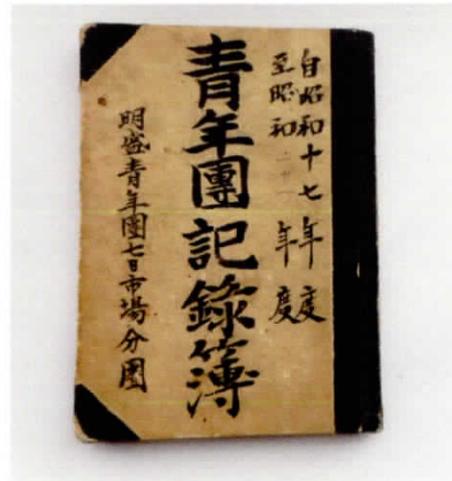
○出征兵士の見送り

- ・ 多くはお宮で見送り ・ 梓橋駅まで見送りもある
- ・ 合同で壮行会をやることも ・ 帰還される方、英霊として帰られるかたも

○諏訪神社祭典の実行 (12 年) <祭典日 4 月 10, 11 日>

- ・ 太鼓打ち 3, 15 日から毎夜 7 時半から 10 時、全員出席 (出不足 1 日 50 銭)
- ・ 余興のこと、花火の打ち上げ
- ・ 総代に対して角灯籠の作成を申請 など

※ 祭典前 1 か月から準備に この年の余興は、夜は映画で昼は浪曲
青年会は、映画の幕掛け、浪曲の小屋の作成など



○ 農場経営をする青年会

○ 15年 紀元 2600 年記念事業

小倉に「報国農場」つくる

- ・月に1度は除草作業に
- ・15年 粟、大豆、小豆、小麦
- ・16年 小麦、大豆
- ・17年 小麦、大豆、さつまいも
家畜用モロコシ

○ 17、20年 地主と協議し継続を



「報国農場」での作業のようす

6 大戦後の青年会

○ 25年の明盛青年会会報から（七日市場のこと）

○ 年間定例行事（この頃の部 産業・教養・体育・家政）

- ・月2回の常会
- ・月1回の会報発行
- ・体育鍛錬月2回（冬季はピンポン）
- ・書籍ダイジェスト回覧
- ・図書館運営、毎日曜図書貸出

○ 3月の行事

- ・ピンポン大会
- ・農事研究会（水稻栽培会）
- ・裁判所見学並びに映画鑑賞
- ・講演会（青年運動のあり方、農村文化について）
- ・会報批判会並びに座談会（分館長を招き）
- ・料理講習会毎週1回
- ・他地区青年会との懇談会

※積極的に活動を展開している

- ・農閑期を利用している

（3月に集中）

- ・多様な内容、活動を展開する
（自分と社会を多様な角度から）
- ・結果を他地区との交流で深めようとしている

○ 4月の行事

- ・遠足社会探訪
- ・敬老会
- ・他地区青年会との懇談会
- ・文化部主催 討論会



明盛青年会会報（25，3，30発行）

○継続してきた活動などから

- 図書館運営は続けていた（本の購入からも）
 - ・ 昭和 38 年「愛と死をみつめて」河野実・大島みつよ
 - 39 年 「女だけの部屋」 河上 敬子
 - 40 年 「安曇野」 白井 吉見
 - 41 年 「女の顔」 源氏 鶏太
 - 42 年 「社員無頼」源氏 鶏太 など
- ※ 31 年 初めて読書会を開いていた記録も



図書棚の一部から

- その他の活動
 - ・ 30 年 ダンス講習 4 回、登山（アルプス銀座縦走など）
 - ・ 31 年 映画会を行う、婦人と青年の懇談会など
- 21 年「報國農場」から「新生農場」にした農場
 - ・ 青年会のだいな活動か 農作物の栽培をする
 - ・ ヒマの実（24, 25） ・キビ（26）
 - ・ ササゲ・馬鈴薯（27・28）
 - ・ ワサビ大根（30）などを栽培する
- 農場は 38 年に返却し終わる



図書貸出簿

7 青年会の終わりのころ

- 青年会の全体記録は 28 年度までで終わり、あとは、部ごとに記録したようで 1 部ある
- ・ 29 年 三郷村が成立（小倉・温・明盛合併） ・あと、三郷村青年団協議会が発足
- ・ 34 年 三郷村連合青年団に

※青年が会社等に勤めるようになる

- ・ 世の中も変革期を迎える
- ・ 青年の活動にも変化が
- ・ 農村から若者を工業へ

※34 年度 家政部の計画から

- 2 月 婦人会との懇談会
- 3 月 料理実習、作業着について
- 4 月 敬老会の料理接待
- 7 月 料理実習、布団の洗濯
- 8 月 お茶会 9 月 保存食について

8 青年団の活動から学ぶもの

- 時代によって違うが、精いっぱい活動を 展開している
 - ・ 地域への貢献、愛情 が感じられる
 - 奉仕活動 敬老会 神社清掃など
 - ・ 生きることをみつめ、主体的に活動を進めている
 - 読書 生活改善 講演会など
 - ・ 時代の進展とともに活動を工夫しながら進めている
 - 大正 昭和戦争期 大戦後など
- 公民館活動の原点ともみえるか
 - ・ 自分を深めつつ、ともども地域づくり文化づくりを進める